

未来へひびきあう人まち・としま

「第59回社会を明るくする運動」
特集号の構成

- 1・8面…・中央大会「区民のつどい」
- 2・3面…・社会を明るくする運動地区大会
- 4・5・6・7…・作文コンテスト受賞作品

発行:豊島区 編集:子ども家庭部 子ども課 〒170-8422 豊島区東池袋1-18-1 ☎3981-2187

防ごう犯罪と非行 助けよう立ち直り

第59回 社会を明るくする運動 豊島区実施委員会



社会を明るくする運動とは

「社会を明るくする運動」は、すべての国民が犯罪や非行の防止と罪を犯した人たちの更生について理解を深め、それぞれの立場において力を合わせ、犯罪や非行のない地域社会を築こうとする全国的な運動です。

この運動は、昭和24年に、東京・銀座の商店街の有志の方々が非行の予防等を広く訴えるために開催した「銀座フェア」をきっかけとして、昭和26年に始まりました。その後、法務省の主唱により、毎年7月を強調月間として全国で展開され、今回で59回目を迎えます。

第59回 行動目標・重点事項

行動目標

- ① 犯罪や非行をした人たちの立ち直りを支えよう
- ② 犯罪や非行に陥らないよう地域社会で支えよう
- ③ これらの点について、地域社会の理解が得られるよう協力しよう

重点事項

- 「犯罪や非行をした人たちの就労支援」

区では、7月の強調月間に、社会を明るくする運動中央大会「区民のつどい」として区内全体のPRイベントを実施するほか、区内12地区の青少年育成委員会を中心として各地区でPR活動を実施しています（2面3面参照）。

今年度の「区民のつどい」は、7月25日（土）に豊島公会堂で実施しました。今回の「区民のつどい」では、黄色い羽の配布と黄色いハンカチを公会堂入り口に大きくツリーのように飾り付けるという新たな試みを実施しました。

黄色い羽は、「社会を明るくする運動」への賛同のあかし、象徴として来場者のみなさんにつけてもらおうというものです。「幸せの黄色いハンカチ」という映画の「罪を犯した主人公が刑期を終え家族のもとに戻る際「今でも自分をまってくれるのなら黄色いハンカチを飾っておいて欲しい」と言ったことに対し家族はたくさんの黄色いハンカチを飾り主人公を迎えた。」という場面を受け、黄色の羽にしたということです。

また、黄色いハンカチの飾りつけについては、罪を犯した人の帰りを温かく“おかえり”と迎える気持ちを表したもので、豊島区実施委員会独自のものです。



社会を明るくする運動 地区大会

第1地区

- ・第27回ポスター展（7/1～7/31）
啓蒙活動の一環として小中学生の描いた101枚のポスターを巣鴨信金ロビーに展示しました。
- ・ラジオ体操（7/18～8/24）
規則正しい生活で夏休みをすごそうをテーマに12町会で開催しています。
- ・納涼盆踊り（7/18～8/1）
地域との交流と夏休みの思い出づくりをめざして3会場で開催しました。
- ・夏休み子ども広場（8/22）
笑顔と思い出づくりをメインに、青果市場でミニ縁日やゲーム大会で、子どもたちに夏のひと時を楽しんでもらいます。



第2地区

7月「七夕おたのしみ集会」は参加者が130人も集まりました。「クリーン作戦」では朋有小学校、豊成小学校、池袋第一小学校それぞれ社会参加活動の授業として、早朝学校周辺地域及び通学路をグループに分けて清掃を行いました。

8月には「サンシャイン納涼盆踊り大会」。近隣町会・商店会・民謡連盟・サンシャインシティ・育成委員会など20以上の団体による共催事業です。また、「親子キャンプ」は南アルプス「尾白の森キャンプ場」で1泊の予定で行います。



第3地区

ゲームラリーとカレーの会

6月20日（土）、池袋第二児童館。子どもスキップ池袋第三の子ども達を対象に池袋小学校で“ゲームラリーとカレーの会”を実施しました。職員の指導のもと、なわとび、ジグソーパズル、ストラックアウト等。五種のゲームでグループ対抗戦、全員を3チームに分けて、スプーンレース、カード返しの団体戦、頭を使い、身体を使ったゲームラリー。
終了後校庭にて委員手作りのカレーで昼食。来年の参加を約束して楽しい一日が終わりました。



第4地区

社明運動の主旨を浸透させるためにリーフレットを作成し（3千部）小・中学校全員と各町会に回覧しました。

次に、週一度のパトロールに加え、鬼子母神境内での“夏市（3日間）、盆踊り（2日間）”と、子どもの安全を守りました。

他、小学校への図書寄贈、スキップの子ども達の希望で、草花やグリーンカーテンを皆で植付けました。

後、親子で参加という事でグランドゴルフ。地域の安全対策をという事でのミニ集会開催。



第5地区

山手線一周歩け歩け大会

7月25日夜～26日朝、第25回山手線一周歩け歩け大会を実施しました。
真夏の東京を暑さにも負けず元気に一周しました。渋谷、五反田、東京駅、上野、西日暮里駅辺りを過ぎると、夜と昼の交代が始まり、空が明るくなってきました。豊島区役所、池袋駅を通過し出発地にゴール。約40キロ11時間、約200名の参加者、子ども達の思い出づくりの行事も終了。小・中学生の頑張りが目についた。委員と地域関係者の協力の賜物です。



第6地区

七夕まつりと縁日

7月4日（土）、「七夕まつりと縁日」を長崎神社で開催しました。

保護司・民生委員・育成委員が地域小・中学校のご協力を頂き、長崎小学校児童の力強い太鼓とともに地区大会は始まりました。当日朝までの雨も一転し、境内の色鮮やか木々の中、集まった地域住民800人は、ステキな親子のフラダンスに見とれながら、笹飾りを始め、ゲームやかき氷を家族で楽しむ情緒あふれる第6地区大会。ホッとした心和みつつ閉会となりました。



～各地区では様々なイベント・活動が行われています～ 主な取り組みを紹介します。

第7地区

椎名町小学校鼓笛隊パレード

7月10日、梅雨空の中で始まった今年の社明活動でしたが、セレモニーが終わる頃には太陽が顔を出しパレードをスタートしました。

大きな太鼓を真っ赤な顔をして一生懸命叩く上級生、それをいつかは自分たちがと見つめる下級生。ともにきらきらした目をしていました。暑い中、お疲れ様でした。

また、東長崎駅にはさくら・椎名町小学校児童のみなさんが書いた「社明ポスター」を張り出し、地域全体で社明活動に取組ました。



第9地区

高松小学校地域清掃

高松小学校では、社明運動の一つとして、近隣にある公園の清掃活動を行いました。

当日は、5カ所の公園を高学年の5学級が手分けをして、それぞれの公園のごみ拾いを行います。担任や育成委員の指示や指導のもと、たくさんのごみを拾い学校に持ち帰りました。

自分たちの住まう地域を自分たちの手できれいにするこの活動は、地域を明るくする意識を持たせる意義ある活動でした。子どもの笑顔が印象に残りました。



第11地区

池袋中学校清掃活動とサマーコンサート

「スタートするぞ！」の掛け声で7月11日、清掃活動がスタートしました。参加を希望した中学生が9グループに分かれ区域内を清掃しました。

「あるいはタバコの吸殻ばかりだ。」おとなは反省しないとダメですね。清掃活動から戻ると、体育馆で反省会。そしてお楽しみの美味しいカレーです。その後は、伝統ある池袋中学校吹奏楽部によるコンサート。地域の多くの方に参加いただき、社明運動をPRできました。



第8地区

夏開き・ハチハチまつり～七夕飾りと縁日～

7月4日、前日までの雨も上がり、時折太陽も顔を出す蒸し暑さの中で、開催セレモニーが始まる前から千早小校庭には長蛇の列。子ども達は開始の合図を待ちわびていました。

暑さで待ちきれない子どもたちは、セレモニーが終わると、カキ氷へと一目散に走り出していました。まずは氷で体を冷やし、一息ついてから楽しそうにゲームコーナーへと流れてきました。

地域の皆様方のご協力により大盛況のうちに終了することができました。



第10地区

我々の社明地区大会は、昨年度より行事内容、場所を変え町会・小学校・中学校諸団体の協力を得て駒込小学校に於いてセレモニーの後、皆さんが楽しみにしている駒込中学校吹奏楽部に演奏していただいている。その後、各町会・諸団体の協力で12ブースの縁日が始まります。来場人数は約1,000名。

準備も大変なので皆さん朝早くから協力していただいている。新たに3団体から参加していただき、盛大に行われる事に本当に感謝しております。



第12地区

・清掃活動

巣鴨小、朋有小、西巣鴨中、少年野球、実行委員が参加して、西巣鴨中から各学校に向かって清掃を行った。

・ふれあい縁日

西巣鴨中学校校庭にて、フランクフルト、カキ氷、カレーライス、あましょく、ソースせんべい、昔遊び、ダーツなど

・ふれあいコンサート

西巣鴨中学校吹奏楽部、ダイナマイツ

・ポスター展示



作文コンテスト受賞作品



小学校の部



「キンモクセイの咲く頃に」

私の家のすぐそばには、東武東上線の駅があり、踏切があります。「カーンカーンカーン。ブォーン。ゴー。ギー。」この音は、踏切が閉まっているにもかかわらず、急いで踏切をくぐって、線路を渡る人がいる時に鳴らす電車の警笛の音です。私は今までに何ども踏切をくぐって渡る大人を見たことがあります。(あぶないなあ。)と思い、胸がドキドキします。(大人なのにどうしてそんなことをするのだろう。)とも思います。夜、ベッドに入って目を閉じようとした時にも、この音が聞こえてくることがあります。そんな時に、私は思い出すことがあります。

2年前に3つ先のときわ台で、駅の線路内に自殺をしようと入った女性を助けようとして命を落としました。宮本警部という警官がいたということです。彼が自分の命を犠牲にしてまで、自殺をしようとして線路に飛びこんだ見ず知らずの女人を助けることができたのは何故でしょうか。人を助けることが警官の任務だと考え、自分を犠牲にしてまで助けたのならば、ものすごく眞面目で責任感の強い人だと思います。でも、それだけではできないことだと私は思います。宮本警部には強い勇気があったのだと思います。宮本警部は「みんなが安心して暮らせるように」ということを願い、警察官となり、地域の人と仲良くなり、地域の安全を守り、誰からも愛される警察官だったということをニュースで聞きました。また、子どものころからお父さんに、「伏してぞ止まん」という言葉を聞かれて育ったそうです。その言葉は、最後までねばり強く精一杯努力し、うつ伏せに倒れるまで、努力をし続ければ、結果は必ず、ついてくるという意味だと思います。お葬式の後に、大切な人を失った悲しみの中で、宮本警部の奥さんは、「夫の死を天命だと受け入れようと努力しています。」と、言っていました。私は、この言葉を聞いた時に思いました。警部の勇気の源は、お父さんの言葉や家族の愛情や信頼など、まわりの人々により育まれたやさしさからきたものではないでしょうか。

私は今、6年生になり、勉強や、学校の委員会活動などを一生けん命がんばっています。色々と大変な事もありますが、今、私が、がんばるのは、家族の励ましや先生や友達など私のまわりにいる人たちみんなの支えがあるからだと思います。宮本警部のように、自分の命を犠牲にしてまで人の命を助けるということは、小学6年生の自分にはできないけれども、今の



「命のきまぐれ」

ぼくが、1番心に残る命のことについて書きます。ぼくが小学校のときある友達と会いました。そいつと会った場所は病院でした。ぼくがケガをして、1人で病院にいったときあいつも1人でした。なぜか分からぬのですがはなしかけてきました。しばらくはなしてとてもいいやつだなと思い仲よくなりました。それから何度か遊ぶようになりました。ずっと遊んでいて、あいつの性格が少しずつ分かってきて、ぼくがいうのも失礼ですが、けっこう悪がきでした。ぼくもあいつもいる悪くなり、2人でいろいろしました。

でもたまにいいこともしたと思います。2人でいてとても楽しかったです。悪いやつだったけど性格は、いいやつだと思います。ぼくからみるとすなおやつではないので、ぼくが悲しいこととかあったりするとすぐづいて変な感じにならざしてくれました。

「ありがとう」といっても、「なんのことだ」みたいな感じでした。ぼくはそういうあいつも好きでした。

でもあいつも、小さいころに重い病気になりました。でも、回復していました。しかしその病気がまたでてきて、あいつも苦しめました。そして入院することになりました。そしたらあいつもが「しばらく会えなくなるな」といってきました。でもぼくはどんな病気かもしれないなって思ってました。

ぼくは、あいてる日に入院している病院までいってあいつも会いにいってきました。病院なのに、ぼくはうるさくし何回かおこられました。でもぼくはあいつの笑顔がみたくてさわいでいました。笑ってくれたときは、うれしくて、すごくうれしかったです。あいつも1つだけ買い物をたのまれたことがあります。それは帽子でした。何の帽子?ときいたらニット帽でした。そのときは中1の春でした。なのでなんでこんな季節にいるのかなと思いあいつも似合うそうなのを買ってあげました。次に病院にいったときにその帽子をあげました。すると「ありがとう」ってあいつもすなおにいってきてすごく心配になりました。そのときの「ありがとう」は今おもうととても重い「ありがとう」でした。

次、会いにいくまで、ちょっと間があいてしまいました。するとあいつもニット帽をかぶっていました。ぼくは「その帽子どうしたの?すごい似合ってるよ」とぼくが買ったのを忘れていてそういうってしまいました。するとあいつも「親に買ってもらったオレの宝物だよ」といっていました。「よかったね。」と

文成小学校 6年生
ささき れな
佐々木 玲奈



自分ががんばるべきことは一日一日を一生けん命に生きること、まわりの人が喜ぶことをすること、困っている人がいたら助けるということ、何事も、あきらめずにかんぱり、努力し続けることだと思います。

社会の出来事を新聞やテレビのニュースで見ていると「人に迷惑をかけてはいけない」「みんなが安心して暮らせる社会を地域ぐるみで協力して作る」という日本人が古くからもっていた良い伝統が、少しずつ失われつつあって、心配に思います。宮本警部のように見ず知らずの人の命を、自分の命を犠牲にしてまで、助ける人がいる一方で、「誰でも良かった。」と言って何の関係もない見ず知らずの人を次々と刺し、命を奪う若者が何人もいるのです。また都会の中では、誰にも気がつかれることもなく孤独死をする老人がいます。現代社会は、「個人」を尊重するあまり、他人のことについては、あまり関心を持てず自分さえ良ければいいというわがままな生き方をする人が増えてきているように思います。宮本警部の命も、警部が助けた命も、自分勝手な若者によって奪われた命も、全部同じ大切な命です。自らの命をかえりみず、他人の命を救った宮本警部の死は、今を生きている私たちに、命の大切さ、勇気を持って生き、何事にも誠実に誠心誠意、努力をすることの大切さを教え、「もっと命を大切にしなさい。」という大きなメッセージを残してくれました。

私の家の近くにある板橋警察署には、宮本警部が亡くなった後に「キンモクセイ」の木が植えられました。先日、私はこの木を見に行きました。警察官が、駐車場の奥にある木まで案内してくれました。キンモクセイは香りが強く、遠くまで香りが届くことから、旅立った人の思い出が遠くまで伝わるとされていて、宮本警部の功績を広く世の中に伝えようという思いで、植えられたそうです。秋にはオレンジ色の花を咲かせ、宮本警部の勇気ある行動や命の大切さを思い出させてくれることでしょう。それが、日本中に伝わることを願い、私はかけがえのない命を大切にして生きていきたいと思います。宮本警部の心は私の中で生きています。皆が協力し助け合える明るい社会の実現のために、まずは自分から、今できる事をしていきたいと思います。

駒込中学校 2年生
うらもと きんが
浦本 銀河



いたら「死んでもはなさない」といっていました。あいつが死ぬという言葉をつかったのは初めてきました。けっこう悪いやつだったのでいろんな人に絡まなくても、死ね、消えろ。などという言葉はいっさいつかってませんでした。強いやつなんだなと思いました。

あいてる日は、ほぼ毎日いって、はなして笑って、さわいで、怒られて、帰って。そんな日でした。ぼくはとても幸せでした。

そしてその日がきました。ぼくは、いつも通り、病院のあいつの場所にいくとあいつもなく、ベットなどもキレイにかたづけていました。移動したのかなと考えているとお医者さんが、この子は亡くなつたよといっていました。そしてお医者さんに、紙をうけとりました。そこには、地図みたいのが書いてありました。お医者さんからあの子からだよと言われ、急いでその場所にいきました。

するとそこには、1つの紙が入っていました。手紙でした。ぼくは、その手紙を読んで涙がでてしましました。内容は、今までのおもいで、自分の病気のことなどでした。

ニット帽のことも書いてありました。お前が買ったんだぞ。ありがとな。と書いてありました。

手紙の最後には、お前のおかげでキライナ病院も楽しかったよ。ありがとな。オレのぶんも考えて人生楽しめよな。じゃあな。とかいてありました。涙がとまりませんでした。

ぼくは、届かないと分かっていても、返事を書きました。最後までカッコつけやがって。

あいつも悪いやつだったけど、人がきずつくことはしない。命をすごく大切にしていた。あいつも学んだことは忘れません。あいつも会えてよかった。あいつの命絶対ムダにしない。あいつもぼくの心の中で生きていますから。また会えると信じています。あいつも会えたおかげで命の大切さがものすごく分かりました。

今、自殺する人が多いです。その人たちに対して、ぼくは、すごくイラだちを感じます。周りの人も悪いかもしれない、でも味方は必ずいる。その人を信じて生きてほしいと思います。命を捨てるということはあっていいのだろうか。いい理由がない。



「『たった一つ』のいのちについて」

2005年、10月、秋。

私が小学校2年生の頃、母が亡くなりました。当時、39歳。母が亡くなった時は、暗闇のどん底に落ちました。おじいちゃんも、おばあちゃんも、みんな悲しみ、だき合い、泣き合いました。当時、生後4ヶ月ほどの弟もいました。家族の大黒柱を失いました。「明日（あした）が来るのは当たり前。」私はいつも、そう思っていました。でも、その時の私の明日は、かん單には来ませんでした。

母の遺体を見た時、母はまるで、すやすやとねむっているように横たわっていました。

私は母を見た時、急に涙があふれきました。顔を見ていられなくなり、私は部屋の片すみで、たくさん、たくさん泣きました。泣いても、泣いてもおさえきれないおもいでいっぱいになりました。

大好きな、大好きなお母さんは、今、天国にいます。

人のいのち。それは、神様がくれた、君にしかない、たった一つのいのち。テレビでよく見る不幸な事件。おさないいのちがうばわれたり、子どもが、親を殺したりします。私は、きっとこのようなことをする人は、自分のいのちの重大さや、人のいのちの重さがよく分かっていないと思います。そして、その人はきっと、さびしいと思います。いのちはお金では買えません。だから、大事にするんです。殺害した人の理由を聞いてみれば、

「むしゃくしゃしていた。」

「だれでも良かった。」

などの、意味不明な返事が返ってきます。私は、怒りをおぼえました。自分が人を殺して、死刑になると、

「私はやっていない。無罪だ。無罪だ。」

と、自分の無罪を強調します。これでは、自分の罪をつぐなうことも出来ないし、社会も明るくなるのではなく、逆に暗くなってしまうと考えます。私はこの言葉をよく思い出します。

「人生は、長い短いという問題ではない。自分の人生をどう最大限に生きるかなんだ。」

この言葉は、800万人に1人の難病をかかえた少年が、最後に残した言葉です。私はこの言葉を、今悲しんでいる人や、人生の道をふみはずしそうな人達にこの言葉を贈って、その人達の心を動かしたいと思います。



「生きている」

千登世橋中学校
1年生
かたやま えりこ
片山 絵莉子



今、世界の中にはかぞえきれないほどの人々が生きています。その中で生きているのが、私であり友達や先生、家族です。その1つ1つの命とその不思議な出会いは、全て目に見えない必然から成り立っていると思います。その命が1つ、2月28日。空へと帰っていったのです。

私の祖父は、いつも私の事を応援してくれ、本当に愛してくれました。祖母とともに貿易会社を立ち上げ、仕事と音楽が大好きで、ワンマンだけれど誰にもしたわれる個性をもっている、そんな人で、自慢の祖父でした。

このごろ、私は思うのです。素敵人生を人より1歩リードして歩く人は、皆自分らしい。自分の個性や才能を理解し、いつも1番大切な事を優先し、自分らしく生きている人、そして、毎日を楽しく過ごしている人、それこそが1歩リードしている人だと思います。そういう生き方を選ぶ人は皆、命の素晴らしさを知っています。1人1人には、やはり現世以前の世界からも今の自分とつながっているんだと信じています。だから、その人のやるべき務めが必ずあるからこそ、皆本気でがんばるのです。新聞を開けば、「自殺」だと「刺殺」、「生きるのが面倒くさくなった。」、「そんないやな言葉があちこちに見受けられます。その度に、

「ああ、本当の生きる楽しさとか、愛情を知らないんだなあ。かわいそうだなあ。どうしてこうなってしまったんだろう。」

と、複雑な気持ちに胸を痛めます。でも本当はこれも、人と人との支え合いで補えることなのかもしれません。命があるから自分が生きている、命があるからがんばれる。そう思えるだけでも、自分に大事なものを何か得る事が出来るのでしょうか。それに気付けば、自分の生き方に自信が持て、大きな価値を感じるのでしょう。そうすると、人生が楽しくなって、きっともっとがんばりたくなるのでしょう。そんな風に、がんばって生きる事が、命を磨く事と実感できる日が来ればと思います。祖父もおそらく、仕事を通して自分の1番好きなこと、自分に1番合ったことに熱中出来た事に誇り高かったと思います。年々としを重ねていくごとに、祖父の姿勢はみるみるうちに魅力的に感じていました。見ていると、「私もがんばろう！」と思えるのです。

詩にはあまり詳しくないのですが、唯一私が大事にしている作品があります。相田みつをさんの「本気」という詩です。初めてこの作品を読んだ時、深く感銘を受けました。

朋有小学校
あゆかわ
6年生
さちえ
鮎川 幸恵



2007年、6月11日。

私の父は、飲食店で出会ったある女性と結婚しました。きょうだいも増え、今では、2人きょうだいだったのが、妹が生まれ3人きょうだいになり、5人家族になりました。

妹を出産する時、父も立ち会ったそうです。新しい生命の誕生に父は、「あの時は本当に感動して、涙があふれそうだったよ。」

と、うれしそうに言っていました。

私は、「いのち」というのは、時には人に感動や、大きな幸せをあたえてくれるものなのではないかと思います。



作文コンテスト
小学生の部
受賞者

作文コンテスト
中学生の部
受賞者



「本気でやれば つかれないから つかれても つかれがさわやかだから」この言葉を、いつも胸に焼きつけて、努力が億劫な時も自分にパワーがもてます。祖父はそのお見本のようでしたから、祖父が四六時中仕事の事ばかり考えていて、一途にがんばっているけれど私や母にはその大変な一面を絶対見せずにいつもにこやかな祖父を、心から尊敬していました。そんな祖父が、ある日突然、ついがんばりすぎたのでしょうか。前日まで普通に仕事をしていた祖父が、朝方。いつも二人三脚でこの世で1番祖父に尽くしていた祖母にも、誰一人悲しませる事なく、この世を去ったのです。最初は信じる事さえ出来なかったのですが、理解した時、祖父の80年の熱い生命力、きえる命があつてわかる命があると知りました。納得のいく、「生きぬく」という気迫に満ちた人生だっただけに、暖やりたいことも山ほどあつたんだろうなど、ねむっているようなおだやかな顔を見て、そう感じました。心筋梗塞やバイパス手術、血糖値の不安定にもずっと薬を飲み続け、そして、52年間、手間の掛かる祖父の隣で、健康と安全と心と、祖父の全てを見守っていた祖父にはなくてはならない祖母の姿は、決してそんなはずではないけれど、気丈にふるまい、いつも通り仕事をするのを見て、本当の愛情を知りました。

聖路加国際病院長でいらっしゃる、御歳98才の日野原重明先生が、私の小学校でいのちの授業をしてくださった時、10才の私達に、すごく難しい問い合わせをなさって、「いのちとは、なんでしょうか？」とおっしゃいました。私は、人の持つ魂の事ではないかと思いましたが、日野原先生は、「いのちは、自分が使える時間なんだよ。つまり寿命。みんなが生きる時間の事。だから無駄な時間などない。いのちの時間だよ。」

という先生のお話しがふと頭に浮かびました。

小さな事も大きな事も、自分にとって必要なことは全て、大事な時間を使って生きるのです。今はまだ12年間ですが、おばあさんになって、これまで積み重ねた自分の時間をふり返ると、他ならぬ私の人生があるのだろうなと、今から楽しみです。そして、自分が1番個性にあふれて「生きている」と思える“いのち”的ある人になりたいと思うのです。

佳作

「すてきなお母さん」

池袋第二小学校 5年生
すずき いおり
鈴木 伊織



10年前、私がお母さんのおなかのなかにいる話です。お母さんは、その時からかんご士さんの仕事をしていて、毎日忙しく、働いていたそうです。ずっと毎日、立ちはだまらない仕事をしていたので、毎日とてもつかりました。

お母さんはお仕事中に急に、おなかがいたくなっている病院に行ったところ、先生から「お仕事をお休みしないと大変なことになりますよ。」と言われたそうです。それを聞いて、お母さんはお仕事よりも赤ちゃんを選びました。

それから毎日、ゆっくりと生活をして、ご飯もたくさん赤ちゃんのために、食べました。でも、赤ちゃんはなかなか大きくならなくて先生から「生まれてくる赤ちゃんは、とても小さく生まれてくるでしょう。1日でも、長くおなかで育ててください。」と言われて、大事に生活をしていたそうです。

お母さんが食器を洗っている時に、急におなかがいたくなっている病院に運ばれました。そのまま入院になってしまった、3日間がすぎても生まれませんでした。お母さんが、とても具合が悪くなってきたので、「しゅじゅつをして生みましょう。」と先生から言われました。

お母さんは、しゅじゅつをするつもりでいると、おなかが急にいたくなっている私が生まれてきました。私は、2000グラムしかない小さな赤ちゃんでした。すぐに、

保育器にいれられて、お母さんはだっこする時間もなかったそうです。とても、さびしい思いをしたそうです。お母さんは毎日私に、会いに行つたそうです。お母さんが先にたいいんして、私は保育器の中で、少しつづきくなっていました。

たいいんしてから、お母さんは少しでも、他の子と同じくらい大きくなるように、ミルクをいっぱい飲ませて、ご飯もたくさん食べさせたようです。私はどんどん大きくなっています他の友達よりも、大きくなりました。みんな、私が赤ちゃんだった時の写真を見ると、とてもびっくりします。

お母さんのお願いは、ただ1つ、健康で、病気せず、大きくなってほしいという事だけだそうです。

私は、子どもにやさしくて、でもおこる時はちゃんとおこって、整り、せいとん、この4つが全てできるお母さんになりたいです。

私はたくさんの人達に、育てられて今の自分があると思います。命というのは、自分だけのものではないと思います。

私はこれから、いっぱい遊んで、ご飯もたくさん食べて、運動もして大きくなっています。

私は、たくさんの人達に助けられ、育てられたのでこの命を大切に、わざわざ、大きくなっています。

佳作

「大切な命」

ある日、私は、図書館で1冊の本を手にした。その本は、「マザー・テレサ」という、愛の力で世界を動かした、1人の立派な女性の話だ。マザー・テレサは、修道院を出て、貧しい人の中でも、最も貧しい人に尽すため、自らスラムへ、たった1人で行った。ごみや汚物に汚れた道で倒れている人々に、手を差し伸べて、「ニルマル・ヒルダイ（清い心の家）」へ連れて行き、どんなに死んでしまったとしても、必死に看病した。そして、マザー・テレサは言った。「あなたも、望まれて産まれてきたのですよ。かけがえのない、大切な命なのですよ。愛されている命なのですよ。」

私の母は、助産師で、赤ちゃんを取り上げる仕事を20年間している。取り上げた赤ちゃんの数は、数えきれない。母の話によると、どの赤ちゃんも生まれるためにには、その子の母親が、死んでしまうかと思うような痛みにたえて産んでいるのだ。私の母も、私が産む時、難産で、私は中々生まれて来なかった。遂には、私の心音が下がり始め、仮死状態になったので、緊急帝王切開となってしまった。

今、世界の人口は、67億人だ。1分に140人、1日に20万人、この1秒1秒にも、何人もの新しい命が誕生している。その1人1人は、母親の生みの苦しみの元に生まれている。

先日、山手線に乗ったら、人身事故のため電車が止まった。どこかの駅で、飛び込み自殺があった様だ。私の心は暗くなった。やっと生まれた命。意味あって生まれた命を自分で絶ってしまう人がいる。2008年、日本で自殺した人は、3万2千人だった。10年前までは、2万4千人位だったのが、この10年間の間に一体

佳作

「命の重さ」

明豊中学校 1年生
いそはた かなや
五十畠 咲耶



命について僕が1番心に残っている事は、おじいちゃんの死だ。

ある日の晩。おじいちゃんの食欲が急に無くなった。そのような日がかなり続いた。しかし毎日ビールを飲みながら大好きな野球を見てボヤを吐いていた。横浜ベイスターズの大ファンで横浜が勝った時と負けた時の機嫌の変わり様が激しく、勝った時に何か良い事をすると必ずお小遣いをくれた。そんな時外出するのが多くなった。病院に行っていました。この時、おじいちゃんは「胃ガン」だったらしい。最初に知ったのはおばあちゃんで、おばあちゃんは母には言ったものの、僕には話してくれなかった。でも僕はうっすら気付いていた。毎日のたばことビール。この生活を何十年と送ってきていたのだからすぐにそう思った。でも僕はそんな事ありえないと思いその事はもう、頭の片隅に置くことにした。

何日か過ぎてついに入院が決定。僕達は毎日お見舞いに行っていた。おじいちゃんはずっとベッドの上でクロスワードをやっていた。僕が見た事無い人達がいっぱい病院に来て、昔の話や一緒にクロスワードをやってたりしていた。そして一度、退院して家にもどって来た。お風呂に入る時体を見るとかなりやせ細っていた。驚いた。僕はおもわず言葉が出なくなってしまった。お風呂上がりのビールはさすがに飲まなかつた。しかし、野球はいつものテンションで見ていた。そして、また入院。クロスワードをやり、たまにテレビを見たりしていた。僕はおじいちゃんの友達が来るといいな広場に行きマンガやゲームをしていた。さすがにそれくらいは気を使ってあげた。そしてまた退院。お正月の事だった。その時がおじいちゃんが家に帰つてくる最後だった。当時、僕は知らなかったが1回目と2回目の退院は体が良くて退院した訳じゃなく、命が残り少なかったからだそうだ。最後にお正月に写真を撮った。その時はおじいちゃんの顔に対して何もな

かったが、今、振り返って写真を見ると明らかにやせ細っている顔だ。でも、そのお正月はとても楽しいお正月だった。

再度入院する前夜。おじいちゃんは僕と兄を呼び出し、「オレはもう死ぬから、いざとなったらお前達は男なんだからこの家を助けろよ。」と言った。僕は笑いながら、

「何、自分で死ぬとか言ってんの！ も～。」
とごまかした。よくテレビで「人間は自分の死が分かる。」とか言っている。この事だ。僕はこのおじいちゃんの言葉を必ず忘れないようにした。

そして入院。しばらくして容体が悪くなり特別な病室に移動した。手足は細く今にも折れそうだった。自と口はずっと開けっぱなし僕はその姿を見た時思わず大泣きしてしまった。おじいちゃんによく一緒にやっていたキャッチボールのボールを手の方に持っていくと、握ってくれた。話す事もできない状態なのに。2月10日。永眠。この時病院に居たおばあちゃんが電話して来て急いで行った。もう息は引きとなっていた。僕はおじいちゃんの顔をさわりながら叫び、泣いた。気持ちが落ち付いたら、おじいちゃんと過ごした日々をいっきに思い出した。おじいちゃんが酔っ払っている時に横浜が負けて機嫌が悪いのに僕が悪さして五十畠家代々の刀（切れない）を持ち怒らせてしまったり、僕が野球チームに入団するとキャッチボールや素振りなどを手伝ってくれたり。色々な事を僕にてくれた。兄も同じ事を思っていたと思う。

おじいちゃんが亡くなった事で、おじいちゃんへの感謝の気持ちや謝っておきたかった事が分かる。色々な人がお葬式に来てくれた色んな人が泣いていた。この出来事の数が多いほどその人の「命」の重さや、大切さ、どれだけ尊敬、信用していたか、が分かるような気がする。だから僕はおじいちゃんの死から学んだ事を生かして人と接するようにしようと思った。

佳作

「命」

ここ最近クラスの誰かが1日に1度は口にする「死ね」「消えろよ」などという言葉。きっと本人は本当に死んだりしてほしいとは思わず軽い意味で言っているんだと思います。だけどその言葉を言われた側は冗談で言われていると分かっていてもやっぱり少なからず傷ついているということを分かってほしいと私は思います。

小学6年生の頃、私はいじめを受けていました。それも、ずっと仲の良かった友だちからです。まだ精神的に未熟で弱かった私は、そのいじめのせいで毎日毎日「死んでしまいたい」「消えちゃいたい」と泣いていました。そのころの私は、死んでしまえば楽になれるんだ、という今思えば下らない考えに、おかしなことに助けられていきました。「いつか今よりももっと苦しくて辛くなったら死ねばいい」という考え方だったからです。「死」こそが私の1番の希望だったのです。

そして、理由は覚えていないけれど今まで1番苦しくなって学校の4階の女子トイレの窓から飛び降りようとした。でも……できなかった。いざ死んでしまおうと思っても弱虫な自分は死ぬこともできないのです。飛び降りることができなかった私はリストカットや包丁を刺してみようかな、など死ぬことだけを考えていました。でも結局いつだって死ぬことができなかったのです。そして、そんな日々をくり返していました。

朋有小学校 6年生
喜多 澄美

何があったのだろう。警察庁の調べでは、10代の自殺の原因で最も多いのは学校問題だと言う。先日の新聞で、いじめによって自殺した子供の親の記事を見た。残された親は、子供を失った深い悲しみから逃れる事が出来なかった。私の学校でも、定期的に「いじめアンケート」がある。私の周りでも、ちょっとした仲間外れやケンカを見かける。それがエスカレートすると、大変な事になるのだろう。私も、一度だけ、仲間外れにされた事があり、こそぞ悪口を言われた時は、とても悲しくてつらかった。以前、担任の先生が「人」という漢字について話してくれた事があった。人という漢字は、支え合って成り立っている様に、私達人は、支え合って生きていかなければならぬという事を教えてくれた。実際、自殺をする人は、自分の心の支えになる友達がないくて、さらにいじめられ、孤独になってしまふのだと思う。1人でもその人の事を分かろうとする友達がいたら、その人はきっと、救われたのではないかと思う。

これから、周りの人が困っていたら、少しでもその子の心の支えになるように、自分の出来る限りの事をしてあげたい。そしていつか、世界中の人が、皆友達になれば、貴い命が失われずにすむ。マザー・テレサが、一生涯をかけて訴えて来た様に、全ての人が、生まれて生きて来たという事を、感じ合える世界をつくっていきたい。

駒込中学校 3年生
鈴木 悠

て、気付きました。
「私、逃げるだけなんだ。」
なんでこんな簡単なことに今まで気づかなかつたんだ
自分は、と自分で自分がバカバカしくなって、元の普通な人間に戻りました。

今、昔の自分を思い出して、昔の自分に一言こう言ってやりたいです。
「生まれたことを恨むならちゃんと生きてからにしろ」と。死んだって結局苦しみからは一生解放される訳はないんです。死んだってきっと感情ってものはずっとつきまとわってくるんです。だって、それが人間っていうものだと思うからです。そして、苦しいとき、辛いときもとりあえず笑っていようと思うのです。だって笑っているってことは、幸せに私は生きているっていう証だと思うからです。

決して私は強い人間じゃないから、色々な人やもの影響でまた昔みたいに死んでしまいたいと思うこともあるかもしれません。でも絶対に私は自殺なんてしません。何故なら私は弱い人間だから、死ぬことが怖いからです。死にたい、でも死にたくない。そんな矛盾だらけの自分の感情ともうまく仲良くしていきたいです。

絶対に逃げないで、前を向いて歩いていこうと思います。この1つだけの大切な自分という命と一緒に。

佳作

「ネットワークで明るい社会を」

文成小学校 6年生
杉野 日向子

私は、夏休みに楽しみにしていることがあります。それは、田舎の祖父母の家で飼っている犬のコロに会いに行くことです。コロは、しばらく会っていない間でも、私のことを覚えててくれてオッポをふって私に飛びついてきます。夏休みは長期間祖父母の家で過ごせるので私はお手伝いとしてコロの世話をさせてもらっているのです。

朝4時起きで海岸のヨットハーバーへ散歩に行きます。この辺りはお年寄り夫婦が番犬として犬を飼っている家が多いため、犬の散歩で毎朝何人かと会います。私とコロが初めて「散歩仲間会」に入ったのは、3年前です。メンバーは、おじさんとおばさんばかりで平均年齢は60歳を超えています。私は、祖父母の代わりに散歩会に加わることになりました。

メンバーのひとり、堀江さんは話好きで絵が上手なおじさんで、こころという賢い柴犬を飼っています。市原さんはお酒が好きな陽気なおじさんで、シロという真っ白なスピッツを飼っています。山根さん夫婦は近所の方で2人とも上品でやさしく、ジャックという少し肥満気味の犬を飼っています。その他のメンバーも楽しい人ばかりです。

「散歩仲間会」は、大好きな犬達と過ごせるだけでなく、おじさん達とのおしゃべりがおもしろくていつも笑い声が絶えません。コロが走り廻って遊んでいる間、動物についての情報交換や町内会のお祭りの事、おじさん達の昔話など聞いたり、私は東京のおもしろい博物館や学校の事を話しました。メンバーの1人が来ない時は何となく心配になりました。私がかぜで休んだ時もとても心配して手紙を下さいました。私は、「散歩仲間会」に入って毎日楽しく過ごすことができました。

東京に帰る時、「待ってますよ。」とお手紙や写真を皆さんからいただきました。コロのおかげで大人のお友達ができました。ところが、私が東京に帰った後、事件が起きました。市原さんのシロがいなくなってしまったのです。やんちゃ坊主のシロは、ヨットハーバーが大好きなので、おじさんが外出中に庭の植木の間から抜け出してしまったらしいのです。その日は、首輪をつけていませんでした。捨て犬と間違えられて保健所に連れて行かれたシロは殺されてしまうかもしれません。おじさんは、心配で夜

も眠れずお酒ばかり飲んでいたそうです。

1週間たって、警察から「シロが見つかった。」と電話がありました。シロは、2キロ近くやせていて、皮膚病にもかかっていました。実は、家への帰り道が分からず、うろついていたシロを親切な人が預かってくれて飼い主を探してくれていたそうです。シロは、町の人のネットワークによっておじさんのもとに帰れたのです。

私は、おじさんから手紙を受け取ってその一部始終を知りました。手紙から、おじさんの心配する顔やシロが見つかってほっとしたと同時に弱り果てたシロの姿を見て涙が止まらなかったというおじさんの様子が目に浮かぶようでした。シロの真っ白な毛並みが思い出されました。おじさんはシロを本当に可愛がっているのが分かります。だから、おじさんはシロを預かってくれた人にとても感謝していました。

私は、もしシロが保健所で殺されたかもしれないと思うと背筋がぞっとなります。「なぜ、保健所は犬を殺すのだろう。あんなかわいい犬達を殺す必要があるのだろうか。」と思いました。保健所は狂犬病の心配もあって犬を保護すると聞きますが、連れてこられた犬は、飼い主に捨てられたかわいそうな犬達が多いと思います。テレビで、人間を信じられなくなった犬がいるのを知りました。犬が悪いのではなく人間が悪いのではないかという気持ちが強くありました。ペットを飼うなら最期まで責任を持ってあげてほしいと思います。

犬は昔から人間と一緒に生活してきました。狩りでも、羊飼いでも犬は人間を手助けしてきました。現在は、体が不自由な人のために介助犬、盲導犬や聴導犬となって働き一生を閉じる犬もいます。人間はこのことに感謝すべきです。

犬というものは、人間の気持ちや愛情を理解できる動物です。だから人と人との関係がうすくなってきた今の社会では、ペットを飼う人が増えてきています。そして、最近は、ペットを通して飼い主同士の交流も行われるようになってきました。犬が好きということで、ふつう話をすることもない人と仲良くなったりすることもあります。これからは、ペットを通して地域の人達が仲良くなって、交流が絶えない明るい社会ができるかなと思います。

佳作

「命について」

千登世橋中学校 2年生
岡田 麻悠子

命について——例えば人は何処から生まれ、死んだら何処へいくのか、前世がこうだとこうなるというようなことは宗教によても個人によても考え方方が様々だと思います。何が正しいかなんて分かりません。

私には何を信じるといったものはないけれど、「リトル・トリー」という物語を読んだことがあります。そこには、誰でも「からだの心」＝ボディー・マインドと「靈の心」＝スピリット・マインドという2つの心を持っていると書かれています。「からだの心（ボディー・マインド）」とは、からだを生かすための心です。家や食べ物を求めたり、家族をつくったりするのに使われ、からだが死ぬ時には死んでしまいます。その心を悪い方へ使って、欲深になったり、人を傷つけたり、自分の儲けだけを企んだりすると、もう1つの「靈の心（スピリット・マインド）」がどんどん縮んでいきます。「靈の心」は、ものごとをきちんと理解するのに使い、「からだの心」の言うままにならないようにします。ここでの理解とは愛と同義ですが、理解してもいのいに愛しているふりをすることとは違います。理解するのに使えば使う程、努力次第で心は大きくなります。そして人間は死んでも「靈の心」を持って生まれ変わります。だから、深い理解の持ち主は、また、強い「靈の心」を持って生まれてきます。という考え方でした。

飽く迄これは1つの考え方なので、前世の行いは関係ないと思う人もいるでしょう。でも私はこの考え方一つ、すごく共感する点があります。それは、靈（スピリット）をなくしたら、つまり深い理解ができなくなると、「生きてるくせに死んでる人ってことになる」

というセリフでした。まさしくそうだと思います。

今、精神的に追いつめられた自殺者、うつ病患者が増え、またある意味で心に深い傷を負っている“人を殺したり傷つけたりすることしか物事を解決できない人”も少なくないといわれています。また、それをストレスの発散とするなど、もはや善惡の区別がつかなくなっている人もいます。そういう人は、本当に、本当の意味で生きているのでしょうか。幸せでしょうか。愛したり愛されたりしていない、もしくはその愛に気付けず孤独でいるケースが多いと思います。

それとは対照的に決して恵まれた環境、体でなくとも必死に生きようとしている人もいます。テレビでは苦しさやつらさに負けずに、取材のカメラに笑顔をむける子供達を見ます。どちらの方々にも、何も知らない私が分かったように語っては失礼だったかもしれません。でも、私が今考える「生きる」とはただ物理的に心臓や脳が動いていることではないのです。「寿命」という限られた時間の中で、相手を理解し愛せる気持ちを精一杯育てていくことだと思います。そうすればきっと自分が存在することで誰かを幸せにできるはずです。

だから私は、本当の意味で生きている人でありたいです。そして多くの人がそうであって欲しいと願います。

せっかく与えられた、重たい「命」だから。

第59回 社会を明るくする運動中央大会「区民のつどい」

7月25日（土）午後1時30分から、豊島公会堂で中央大会『区民のつどい』を開催しました。

社会を明るくする運動の趣旨を広くPRするために、『区民のつどい』を開催しています。

第1部

セレモニーに続き作文コンテストの受賞式並びに作品発表を行いました。『命』をテーマに区立小中学校のみなさんからご応募いただいた作品総数932点の中から選ばれた小中学校各5点について受賞式を行い、そのうち上位各2作品の作文を発表してもらいました。

作文には、自らの体験・経験に基づいたそれぞれの『命』に対する考え方、思いがつづられており、身近な人の死について書かれている場面では、静かな会場から時折鼻をすする音が聞こえていました。

また、今回は社会を明るくする運動を応援したいという趣旨で同日に実施された、東京都ドッジボール協会主催によるドッジボール大会の表彰式を行いました。

区内小学生1~3年生で構成する8チームによる熱い戦いが繰り広げられ、みごと勝利した2チームが表彰を受けました。優勝は「要1児童館チーム」準優勝は「スキップ富士見台チーム」。表彰状を受け取る子どもたちの誇らしげな顔がとても印象的でした。

第2部

『ふれあいサマーコンサート』として、区立高南小学校の高南ジュニアバンドの演奏、ジャンプ東池袋利用者によるダンス・漫才、区立西池袋中学校吹奏楽部の演奏、立教大学学生サークルによるアカペラと小学生から大学生までの世代を超えた若者のパフォーマンスが披露されました。

高南ジュニアバンドは、みなしっかりと落ち着いてそれぞれのパートを演奏していました。演奏する姿がとてもかわいらしく観客のみなさんは演奏に見入っていました。

続くジャンプ東池袋利用者によるダンスイベントでは、昨年に引き続き北園高校の『RASH RASUCAL』が、ロボットの動きのような不思議なダンスとパワーあふれるヒップホップダンスを披露してくれました。観客席からは、「昨年よりさらに腕をあげたね」という声がささやかれていました。また、今回は全国高校生お笑い選手権大会～ライブお笑い甲子園～で優勝経験のある「ジャガモンド」がブロ顔負けの漫才で会場を沸かせてくれました。マイクのスイッチが入っていないというハプニングもありましたが、そんなことはものともせず、軽快な語り口で会場の笑いを誘っていました。

3年連続で出場してくれた西池袋中学校吹奏楽部の演奏は、コミカルな選曲と確かな技術で風格すら漂わせており、指揮者である先生のパワフルな指揮とあわせ耳と目で観客を魅了していました。客席からのアンコールには「津軽海峡冬景

プログラム

【第1部】

セレモニー

作文コンテスト表彰

作文発表

ドッジボール表彰



【第2部】 ふれあいサマーコンサート

高南ジュニアバンドの演奏

ジャンプ東池袋
ヒップホップダンス・漫才

西池袋中学校吹奏楽部の演奏

立教大学アカペラ「ジュブナイル」

色」という演歌で応えてくれました。

立教大学のアカペラサークル『ジュブナイル』は、全国ハモネブリーグで決勝戦に出場するという経験を持ち、さすがとしか言いようのない素敵なハーモニーを聞かせてくれました。まだまだ聞いてみたいという客席の思いが大きなアンコールとなり、最後に「終わらない世界」を聞かせてくれました。

そして、今回は初の試みとして第2部の司会を出場者である「ジャガモンド」の2人にお願いしました。第2部が始まると2人の元気な声が会場に響きわたり、客席を上手に巻き込んだやり取りに時間の経つのも忘れ、あっという間に終了の時刻を迎えていました。

今回の中央大会「区民のつどい」では、第1部では感動を与え、第2部では会場がひとつになり大盛況の中央大会「区民のつどい」となりました。会場を後にする観客の中には、「楽しかったね」と言う声が聞かれました。また、出演者からも、機会があればまた出演したいと言う話もいただきました。

高南ジュニアバンドの演奏



ジャンプ東池袋「ジャガモンド」漫才



立教大学「ジュブナイル」アカペラ

第59回 社会を明るくする運動
「区民のつどい」
豊島区実業委員会



ジャンプ東池袋「RASH RASUCAL」
ヒップホップダンス



西池袋中学校吹奏楽部の演奏